妖怪の無くした物

kyou

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
妖怪の無くした物

【Ｎコード】
Ｎ９０１９Ｍ

【作者名】
ｋｙｏｕ

【あらすじ】
ある日、突然「妖怪を見た」と皆口々に言うようになる。妖怪を探しに来た少年達は妖怪に『妖怪の世界』へ引きずり込まれ、『無くし物』を探さなくてはならなくなった。

第一話　『噂』

「はぁ？」

「だから　出たんだって！妖怪が！」

「妖怪って・・・まさかあの噂信じてるのかよ」

この町にはある噂がある

『妖怪の無くし物』

妖怪の世界にある七色の小瓶がなくなると

妖怪は人間界に現れ人を襲い始める

そして世界は滅亡する

そんな噂があるが・・・信じている人なんて数少ないだろう

この学校にも信じてる人は、山野大喜　コイツ位だと思う

「なぁ・・・翔太　いいだろ？」

「あ？何がだよ」

「後で行ってみようぜ！絶対出たんだって！」

行かないと行ったら、先生に窓割ったこと言うぞって言われたので
しょうがなく行くことにした

「ここだよ　ここ」

「へー・・・　ここに居たのか？」

「おう！ここに出たんだよ！」

「ここに・・・・・・ねぇ」

周りを見渡す限り特にそれらしいものは見当たらないし、勿論人影
すら無い

「やっぱり見間違いだろ」

「なわけ無いだろ！絶対妖怪だったって」

「だからそれが見間違いだって言ってるんだよ」

「絶対絶対妖怪だって！絶対妖怪だったよ」

・・・・・どうでもよくなってきた

ガサッ

「妖怪ッ？！」

「うヒャァ？！」

「あれ・・・ゆかりじゃん　どうしたの？」

今出てきたのは、内田ゆかりで、大喜の幼馴染で結構仲が悪いらしい

「大喜に・・・闇崎君？なんでここに？」

「妖怪探しらしいよ」

「よー・・・かい？」

「うん」

「・・・」

「どうした？ゆかり」

「よーかいって妖怪？」

「ああ」

「あたしも見たよ！昨日ここで！」

・・・・本当に出たのだろうか？

さすがに少し気になってきた

でも本当に妖怪が？そんな漫画やアニメじゃあるまいし出るはずが無いだろう

でも大喜はともかく内田はそんな見間違いをするはずが無いと思う

やはり本当に出たのだろうか？

第二話　『犬』

あれから3時間探したが結局妖怪は見つからなかったのであきらめて家に帰る事にした

そして次の日学校に来たら・・・

「昨日妖怪見たんだけど！」

「俺も見た」

「塾の帰りに見たー」

などと妖怪を見た人が次々と増えていった

「なぁ・・・翔太　これでも居ないって言い切れるか？」

「・・・ぶっちゃけ　ビミョー」

いるのかもしれないが信じたくない

「ねぇ！今日もう1回探しに行かない？」

「えー・・・また行くのかよ」

「別にいいだろ！行こうぜ！」

何で妖怪を探さなければいけないのだろうか？

「さーっ！探すわよッ」

「おー！」

嗚呼、テンション高すぎ

それより内田と大喜って仲悪いんじゃなかったっけ？

すげー仲よさそうだけど

「じゃぁオレ向こう探すからゆかりはあっち側探せよ」

「あたしが向こう側探すわ！大喜があっち側探してよ」

・・・前言撤回、仲悪い

「なぁ　何で妖怪なんか探さなきゃならないんだよ？」

「何って・・・そりゃあ　面白いからだよ」

面白いって・・・・世界が滅亡したらどうする気だろうか

早く帰りたい、そう思ってたら向こうで変な音が聞こえた

「うヒャァ？！」

「犬だね」

クゥーンと鳴きゆかりに犬が寄ってきた

「何でこんな所に犬がいるンだ？」

「この犬・・・怪我してる」

「ほんとだ　手当てしなきゃ・・・」

「でもどうするんだ？」

ここは村から結構遠く片道1時間かかる所だ

1回向こうに戻ったらここに戻ってくるのにしばらく時間がかかる

「じゃぁ今日はしょうがないから帰ろうよ」

「そうだなー　じゃぁ明日続きやろうな」

まさか毎日見つかるまで探すのか？と聞こうと思ったがやめといた

アレから1ヶ月がたった

アレから毎日毎日探してみたが結局見当たらなかった

その内「妖怪を見た」という人も減っていき、その内誰一人「妖怪を見た」という人が居なくなった

皆が見たものは本当に妖怪だったのだろうか？

そんな疑問が頭を過ぎる

「どうしよう！ねぇどうしよう！」

「何があったんだよ・・・」

ゆかりが凄いあわてている

「あの犬が居なくなったの！」

あの犬とは前見つけた怪我をしていた犬でゆかりが飼い主を探しながら犬を育てていたのだ

「別にいいだろ・・・あの犬なんか不気味だし」

あの犬は最初は小さい犬だったが1週間経つと倍に、2週間経つとそのまた倍になっていた

「良くないよ！あれだって犬なんだよ！・・・多分」

「多分なんじゃじゃねーかよ」

「さゆりに翔太！何話してるんだ？」

「あの犬が消えたらしい」

「へぇー・・・えぇ？！あの犬がそこら辺うろついてたらどーするんだよ」

確かにあのでかくなる犬がそこら辺にうろついてると考えたら怖い

「じゃぁ犬を探しに行くか！」

妖怪探しの次は猫さがしか・・・と思ったが、まぁあの犬がうろつかれたら困るから仕方が無い

そして放課後

「よし！じゃぁ犬を探しに行くか！」

「おー・・・・」

あれって本当に犬だろうか？そんなことはどうでもよくなってきた

第三話　『消失』（前書き）

今回かなり短い・・・かもです

第三話　『消失』

犬は結局見当たらなかった

そして事件が起きた

消えた

学校が突然

跡形も無く消えた

「おい！翔太！さゆり！学校は何処へ行ったんだよ」

「オレに聞かれても困るんだけど」

どうして消えたのか誰もわからない

その時学校に残ってた人

つまり先生と部活をしていた人も消えた

そして次々と人が消えていった

そして次の日

さゆりも消えた――――

「おい！やばいんじゃねーの？」

どうして消えた？

「なぁ・・・これってもしかして妖怪の仕業なんじゃ・・・」

「妖怪・・・そうかもしれないな」

もうこれは妖怪がやったとしか思えない

周りの人々も口々妖怪の仕業だ！などと言っている

「どうすればいいんだろ」

1ヶ月前から妖怪は現れなくなっている

なのに妖怪を探すなんてことが出来るだろうか？

嫌な予感がした

第四話　『謎』（前書き）

今回長いのか短いのか分かんない……ｏｒｚ
だってＤＳで作ってるから～（おい

第四話　『謎』

「ハァ……ハァ……」

よく分からないけど嫌な予感がする

オレの勘は結構当たるから余計心配だ

「おい……ッ　どこ行くんだよ！？」

「探す……」

「探すって……どこか心当たりあるのか？」

モチロン有る訳無い……だけど、探すしか無い

何故急に物や人が消えるようになったんだ？

落ち着け……考えろ

あの犬が居なくなってから突然、学校が……消えた……？

そういえば、あの犬を拾った頃だ

『妖怪を見た』と言うが減ったのは……

まさか……あの犬が……その妖怪だ、とか……？

でも……そんな事って、あり得るのだろうか？

そもそも妖怪……？

今まで妖怪が出たなんて話し聞いた事がない

あの噂に関係しているのだろうか？

考えれば考える程謎が深まる一方だ

一度頭を冷やさないと……

「おい……」

「おいッ！聞いてるのかッ！」

ハッ

「な、なんだ？」

「何急に立ち止まってるんだよ」

「あ、ああ……悪い」

頭がおかしくなりそうだ……

第四話　『謎』（後書き）

感想くれるとありがたいです～

第五話　『黒』（前書き）

ゆかり視点デス☆
※短いです

第五話　『黒』

「ここは……どこ？」

私は、気がついたらここに居た。

ここはどこ？　と、思いまわりを見渡してみた。

だけど、周りは真っ暗でここが何処だか分からない。

何か危険な感じがする。

何か、私に刃を突きつけられた、そんな感じ。

怖い。

恐怖が私の中を渦巻いている。

誰か……助けて……。

ガタッ

「……？」

遠いところで何かが落ちた音が聞こえた。

ここに誰かいるの？

誰？

しーん……

「き、気のせい……だったの、かな」

ここは、何処？

一体どうすれば……

第五話　『黒』（後書き）

感想等あれば宜しくお願いします

第六話　『穴』（前書き）

長さ加減が分かりませんので、短かったら短い、長かったら長い、と言って頂けるとありがたいです！！！

第六話　『穴』

「なぁ……翔太？」

「なんだよ」

「この穴は……なんだろう？」

今、俺達は森へ来た。

周りは木、木、木。

見渡す限り、木以外何も無い。

だが、でかい岩が１つあった。

だいたい５ｍくらいの大きさで、直径２ｍくらいの穴が開いている。

こんな所にこんな岩があるのは少し不自然だ。

「こんな所に、こんな岩あったか……？」

「無かった……」

ボワッ

「うわ……ッ？！」

穴から急に何かが出てきた。

「ひっ人？！」

「バカヤロー！　俺様が人間に見えるかァ？！」

「うん、見える」

穴から出てきたのは、大体１８０ｃｍくらいの男の人。

赤い！

全体的に。

髪の毛か赤くボサボサした感じで、目は赤黒い感じで、おまけに服も赤い。

「てゆうか……誰だよ」

「俺様？　俺様は勿論、妖怪だよ」

第七話　『小瓶』（前書き）

ちょっとギャクをいてれー……みた。あ、ほんの少しだよ？

第七話　『小瓶』

「は……？妖怪？」

「うん！俺様は妖怪だ！」

「なぁ翔太……どう思う？」

「どうって……あんなの嘘だろ」

「嘘じゃないよ！俺様は妖怪だぞ！」

どっからどう見ても人間にしか見えない妖怪（？）が、俺に紙を渡した。

「何？これ」

「俺様はこの小瓶を探しているんだよ　見なかった？」

「見てない……けど」

もしかして……この小瓶ってあの噂の小瓶じゃ……

それよりなんで？　なんで光ってるの？

紙に描いてある小瓶が、七色に光っている。

「大変なんだよ　この小瓶をなくしたら俺様の世界とお前らの世界がごっちゃになるんだよ」

「ごっちゃ？」

「俺様はよく知らないんだけど、世界を安定させるための物らしいんだよね。あの小瓶」

あれ……噂と違う。

「それで、その小瓶なくしちゃったから妖怪が人間界に次々と……」

「あー……あれだね。皆が妖怪を見たって言ってたね。うん。」

「今度はこっちの世界で人間がいっぱい現れたんだよ！」

「あれ？そもそも何で小瓶なんてなくしたんだよ？」

「目を離した隙に……盗まれた？」

「おいおい……」

そんなに簡単に小瓶を盗まれて、世界がめっちゃになったら困る。

てゆうか、何で疑問系？」

「あ、間違えた。盗まれてた」

過去形？！

「あ、そうだ。これからしばらく仲良くさせてもらうから自己紹介しよう！」

「俺は、山野大喜だ！」

「闇崎翔太。てゆうかしばらく仲良くさせてもらうってどうゆうこと？」

「俺様のこと手伝ってくれ！小瓶探してくれよ！」

第八話　『荒地』（前書き）

書いてる本人が、主人公達の名前を忘れたので確認！↑

闇崎翔太　（やみざき　しょうた）

山野大喜　（やまの　だいき）

内田ゆかり　（うちだ　ゆかり）

零兎　（れいと）

翔太、大喜、ゆかりは中学生です。

２年生なんです！

零兎は年齢不明ってことで（笑）

第八話　『荒地』

「え？小瓶を探すのを手伝う？」

冗談じゃない、と言おうとした途端、目の前が真っ暗になった。

「うおっ？な、なんだ？！」

「あ、俺様の名前は零兎って言うんだ。よろしく」

「よろしく、じゃ無くて！何？今どうなってるの？」

「まぁ、ちょっと待っててよ～」

「おーい。翔太ー？起きろー」

「ん……んぁ？」

気がついたら、荒地にいた。

「あ……ここ何処……？」

「ここ？俺様の家」

「家？何処が家？」

ここは、枯れた植物や、老いた動物がちらほら居て、家とは思えない。

どっからどう見ても、ただの荒地にしか見えない。

「ここが……ほんとに家？」

「うん、凄いでしょ」

うん、凄い。いろんな意味で。

「そうだ、零兎。ゆかり知らない？」

「ゆかり？誰だ？」

「俺達と同い年の女」

「んー……？分からない」

「そっかー……」

「あ……」

「どうしたんだ？」

第八話　『荒地』（後書き）

こんなところで力尽きた←

第九話　『行方』

「そういえば、人間界から消えた人や物は、何処かの危険区域に入ると思うよ」

「じゃぁ……そこにゆかりが？」

「うん。いると思うよ」

「本当か！」

「うん。あ、小瓶を取り戻したら元の場所に戻ると思うよ。多分」

多分ってことは戻らないかもしれないのかよ。

「誰に盗られたのか分かってるのか？」

「分からない？」

何で疑問系なんだよ。

「分からないから、犯人を捜す所からだな！」

「あ、そうそう、危険区域ってほんと危ない場所だから。」

「え？」

「殺されても……怒らないでね？」

いやいやいや。普通怒るだろう。

「それなら助けてから行った方が、良いんじゃないの？」

「危険区域って言っても、１００ヶ所以上あるから……」

「何処だか分からないの？」

「……うん」

「じゃぁ小瓶を探すしか無いのかー」

「ねぇ、本当にどうやって探すの？」

「わかんない」

こんなんで大丈夫なんだろうか？

第十話　『欠片』（前書き）

祝！１０話
毎回サブタイトルに悩まされます（一”一；A

第十話　『欠片』

アレから俺達は、そこら辺を歩き回っていた。

勿論、小瓶探し。

手がかり無しで探し回っても、見つからないだろうけど。

「無いね。」

「何が無いね　だよ。ただそこら辺歩き回ってるだけで、見つかるわけ無いだろ」

「……」

「でも、見つからないと困るんだけどな」

「だよなぁ……」

「……」

「今何時？」

「何で今そんなことを聞くんだよ」

「……」

「あ、ごめん。」

「……」

「何で謝ってんの？」

「あれ？なんでだろ？」

「……」

「なんかここ来てから変だよね。」

「てゆうか、零兎？どうしたんだよ」

「いや……あそこ、光ってない？」

零兎が指差したところが、七色に光っていた。

まるで……あの小瓶の様に。

「ってあれ、小瓶じゃ……」

急いで駆け寄ってみると、小瓶は無かったけど、変わりに何かの欠片が落ちていた。

「あれ？何これ」

「これって……！」

「え？何？」

「小瓶の欠片……だと思う。」

「欠片?!」

「これくらいだったら別に大丈夫だと思うよ。俺様は」

お前がかよ

第十一話　『目撃』（前書き）

只今暑くて暴走気味（（（

第十一話　『目撃』

「零兎！」

「ん？あ、梓？」

「あれ？誰？この子達」

「こいつらは、俺様の友達だ」

……何時友達になったんだよ。

「アタシ、梓っての♪ヨロシク」

「俺は山野大喜だ。よろしくな」

「闇崎翔太。ヨロシク」

「それより、何でアンタが人ん家に居るのよ」

あ、ここも家なんだ……？

「あ、うん。あれ知らない？小瓶」

「あー。あの七色の？」

「そー。それ」

「うん。知ってるよ♪」

「馬路で？何処？」
「アルナとレントが持ってた」
「何処へ行った？」
「んー……わかんない♪」
「じゃぁどうすんの？」
「どうするって……どうするの？」
「あ、でも、６８地区の方へ行ったよ」
「分かった！ありがと！」

「ここ？」
「うん。ここが６８地区だよ。」
「うわー……荒れてる」
零兎の家？の倍は荒れ果ててていて

植物は全て枯れ果てて、虫一匹と居なさそうな感じ。

「ここなんだけど……ここ広いんだよね」

確かに。

おまけに洞窟っぽい穴がそこらじゅうにあいている。

「おい……これ全部入って探すのか……？」

「俺様はやだよ。」

「やだよ。じゃねーよ」

「あ、そうそう。たまに……出るから」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9019m/

妖怪の無くした物

2010年10月13日04時10分発行